

# からす専門大學

## 開講準備構想中

### テーマ(予定)

- ・米を作る(実習あり/交通費支給)・野菜を作る(実習あり)・パンクを振り返る・単館映画・ジョージジェンセンのデザイン・コンセプト・落語×××・ブータン。チベット。・ゲタソン探訪・哲学・ヤンヒポの善悪・ヤンヒポの葬祭(実習あり)・辞書を引く(実習あり)・すぎ丸に乗る・阿佐谷団地再開発計画とは何か・素人系税法・農薬ってどうよ・等々



第2巻第5号  
通巻第40号

発行所 □東京都杉並区成田東4丁目3番44号 □〒166-0016 からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

あなたが自分の部屋でCDを聴いているとしよう。その場合、あなたの耳に届くのは、スピーカーから発せられる音楽ばかりではない。部屋の中の蛍光灯やコンピュータが発生させているノイズや、窓の外から漏れ聞こえる鳥や虫の声、あるいは、風が木々やカーテンを揺らす音などなど、様々なものがあなたの耳に届いているはずだ。環境に溢れているそのような音群の中から、あなたは自分の望む音楽を聞き取ろうとすることに。耳を閉じることはできなくても、人間は、所謂、カクテル・パーティ効果と呼ばれるかたちで、聴きたい音がある程度は選択しているのである。何かに集中しているときには、周囲の音が全く聞こえなくなる現象を体験したことはいないだろうか。そういう意味では、聴くという行為は、思いの外に能動的である。

聴く。この表現は、通常は空気伝導によるものを、つまり耳を経由してのことを指す。けれども、われわれが音を聴くのは何も耳からばかりではない。自分の声を録音して聴いてみると、自分の声だとは思えない。そんな体験は誰にでもあるだろう。それは、自らの声は頭蓋骨に響く振動による骨伝導で聞いているからである。リヴィング・カラーやだよんずのステージは、爆音が売り物だとは言わないものの、それに準じたところがあるのは確かだ、人々は、その空間に

において、耳や頭蓋骨經由で音楽を聴くだけでなく、足の裏や腹部などなど、全身で振動を感じる。そのようにして、全体の音を総合的に把握しているのだ、と言えなくもない。これもまた「聴く」ことである。

考えてみれば、音はそもそも振動現象による波であるわけで、耳だけでなく、体感するのは当然のことであるとも言える。ガラスの箱に閉じ込められたバットマンが低く大きな声を出すことによってガラスを割って脱出する場面があったような、定かならぬ記憶があるが、実際にそんな大声を出せるかどうかはともかくも、音は波であり、空気を媒介として圧力を発生させるものである以上、理論上全く不可能であるとは言えない。

私の生活を例にとると、爆音野郎と一緒にスタジオに入ってリハールをするような際にたまげるといった振動を感じることはあるものの、日常生活の中で、音を物理的な圧力として感じることは滅多にない。しかしながら、気がつかないところで、音に晒されている可能性がある。可聴範囲を超えた低周波を連続して与えられると、眩暈がしたり、吐き気がしたり、といった身体の不調を引き起こす事例もあるようである。相手が見えないものであるだけに、些か恐ろしい話である。

(最終面に続く)

#### 今日の紙面から

- 二面(オラ面)
- 松本と話そうピンポンパン
- 三面(芸術面)
- レイズギャラリー
- 四面(からすライブラリー)
- 本。火星年代記
- CD。アストル・ピアソラ・ライヴ
- 映画。ウェイク・アップ! ネット
- 五面(スポーツ面)
- ヤンヒポザッピ
- 七面(文化人類面)
- ヤモリしばへ

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できません(無茶じゃない範囲で)。

## 松本と話そう!ボンボンパン

「ふつうに凄い。」「ふつうにかっこいい。」「ふつうに旨い。」

近頃、仕事先(予備校)の女子生徒の間や、遊び先(飲屋)の女の子たちの口から普通に聞かれる、自分には不通のボキャである。

特に何かのTV番組で誰かが用いてその影響で広まったものでもない。誰が言い始めたのでもなく、まるで類人猿が道具の使用を始めたのと同様にあくまでも自然発生的に、なのである。

そこで、男の性としてはまたまた「なんで、この言葉が流行ったのか?」「その裏にはどんな心理が働いているのか?」なんて考えるのである。(用いている女の子たちに言わせれば、どうだっていいんじゃない?であり、確かにそうなのだが。)そういえば、数年前は、「超」が台頭した。あれも自然発生的に同じようなところで生まれ使われていた。そして今は「ふつうに」。なんでやねん。

(一)デフレが急速に進んだ。例えば、吉牛1100円台。ユニクロのセーター11000円台。キャバクラ113000円台が当たり前の時代。しかも、そのどれもそこそこ旨かったり、丈夫だったり、可愛かったり、と品質も外れていない。ほんの短期間で質は維持したまま価格が

下落してしまっているのである。そして、今はそのギャップにまだ新鮮さを覚えている時期。だから、本当ならただ、「旨い」「丈夫」「可愛い」で済むのに、わざわざ「ふつうに」(つまり、高くなく、手頃な価格で、自分には手が届く範囲で)が付いてきているのだろう。つまり、彼女らにとっては喜びの言葉なのである。

(二)情報の電子化が急速に進んだ。携帯電話があれば、いづどこでもEメール機能を用い、自分の意志や気持ちを文字に託して伝えることが可能になった。が、そこに介入するのは決して肉筆、肉声ではない。なかなか気は伝わらない。本心も掴みにくい。そしてまたもし、一方の側が相手を拒絶したいならば容易に、その文字を消去できる。そしてそこにはP i m a i i (手紙)とは違い何も残らない。そうこうしているうちに自分の本当の感情は出にくくなる。そして、奥に埋もれたままでいるうちに、表出し外部との摩擦への抵抗力がなくなってくる。簡単に言うとなんかヤワになってくる。とはいえ、外部の強い刺激に諸に触れることは引きこもらない限り避けられない。そこで、その際のクッションとして、摩擦の緩和剤として、「ふつうに」が使われているのではないのか?例えば、「凄い」と認識した途端、その強い刺激を受容しなければならぬ。しかし、それへの耐性が備わってない。そこで、「ふつうに」と言うことによってその「凄さ」の程度を自分が受容できる範疇まで落とすことができる。つまり、無意識

の自己防御作業としての道具としてその言葉を使っているのだ。

みなさんは、どっちだと思えますか?

または、そんなんではなくこうだろう、なんてありますか? あれば、このHi magazineまでメール下さい。

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。あなた一人で悩まないでください。

## フリーガン対策 指導いたします

# ストーカー バスター

相談無料  
秘密厳守

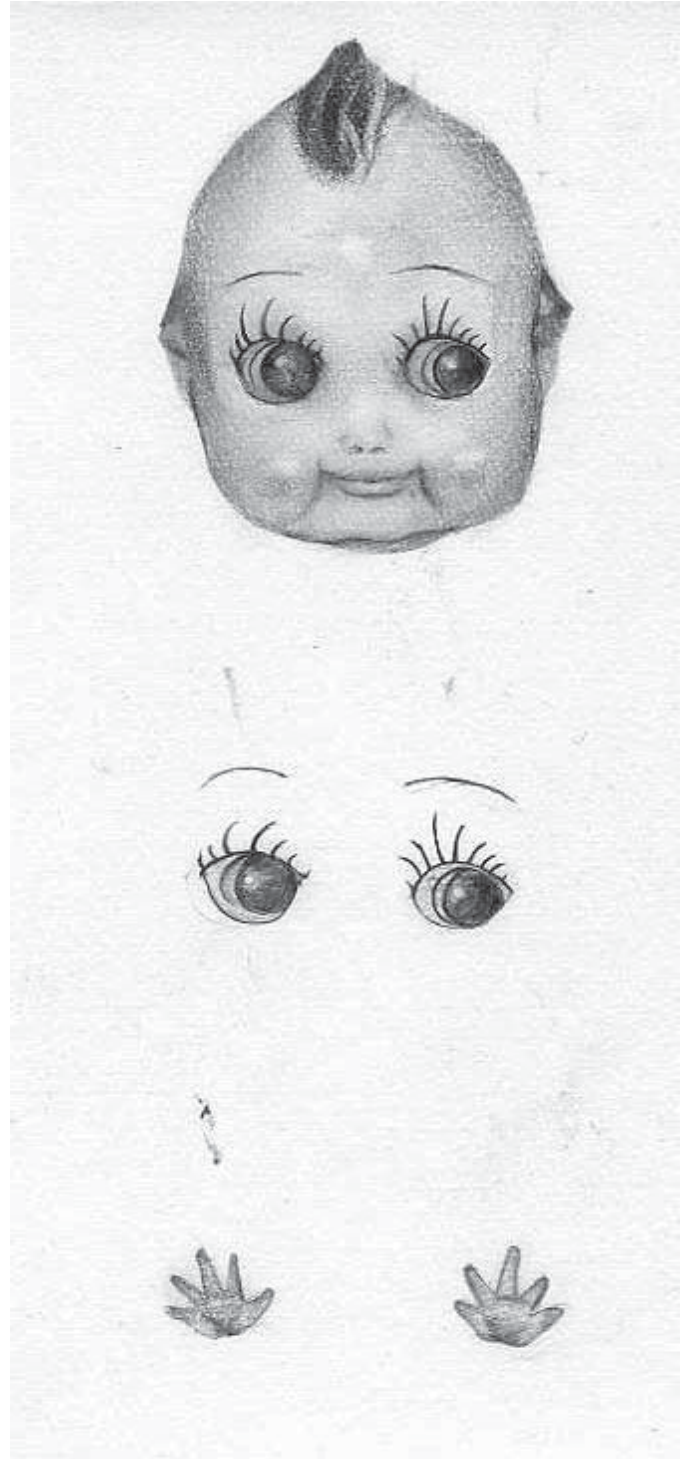
防犯用品販売・防  
犯対策指導も致し  
ます。

tora@pda.co.jp  
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216  
Los Angeles: CA 90028, USA  
voice : +1-310-493-1001  
facsimile : +1-323-466-5645

produced by  
**P.D. Agency**

## Rei's Gallery

## 『キユーピー』



長津田に「子どもの国」という、その名の通りの子どもの遊び場があります。そこで私はバイトをしていて、一緒にお絵書きをしたり、遊具の監視をするという楽しい肉体労働をしています。

そこに来る子どもはだいたい幼稚園児と、小学校一、二年生なんです。彼等のおしゃべりと行動のオマセさんっぷりにはびっくりさせられます。二十才の私がガキなのか、子ども達が大人なのかかわからないけど、クレヨンしんちゃんが目の前に実在しているような状態が起きています。例えば迷子になっても泣かず、自分が迷子になったんじゃなくて、親が勝手に姿を消したという具合にタンタンと説明してくる子。

女子バイトをナンパする(可愛いコ限定)男の子。女子バイトをライバル視する女の子(けっこう怖い)。真剣に恋愛相談(結婚前提のおつき合い)をされて、適当な返事じゃとても済まされないぐらいに追い込ませる子。などなど。

私が彼等ぐらいの幼稚園児だった頃、迷子になれば大発狂して泣きました。花屋のひでクンが好きでしたが、その恋は、目で覚めました。私の子ども時代とはちょっとづつ変わったのか、それとも私も実はそうで忘れちゃったのか? 一つ言えるのは、私は彼等と遊ぶと言うより、遊ばれている状況にあります。

というわけで、子どもの象徴キユーピーです。

『ウェイクアップ! ネット』

Waking Ned Divine



監督・脚本：カーク・ジョーンズ

出演：イアン・バネン、デヴィッド・ケリー、スーザン・リンチ、ジェームズ・ネスビット、フィオヌラ・フラナガン、モーラ・オマリー、ロバート・ヒッキー

1998年公開（イギリス）

DVD：東芝デジタルフロンティア

設定からしてイギリスならではの味である。アメリカ映画のように、ゴージャスなおねえちゃんや美形のヒーローが出てきたりはしないし、フランス映画のように妙に屈折した人物が出てくるわけでもない。しかしながら、ジャッキー（イアン・バネン）とマイケル（デヴィッド・ケリー）のふたりをはじめとして、登場人物がそこはかとなく当たり前、その当たり前さ加減がリアリティを与えるばかりでなく、微妙な魅力となつていく。抑制の効いた演技もいい。

また、映像のあつけなさも秀逸。絶景があるわけではなく、ごくごく田舎のごくごく自然がありふれた景色。そんな在り来たりの人物たちが在り来たり景色



(全太)

を背景に、ありきたりではない事態を巡ってあたふたした。これだけで、何だか楽しくなってきた。落し所もほどよく、大笑いさせられることはないけれど、笑わずにはいられない。我儘はあさん問題の顔末、子どもの実父は誰なのか、などなど、なるほどね、と。イギリス映画にはイギリス映画の道があるのである。いや、ほんと。



『火星年代記』

THE MARTIAN CHRONICLES

レイ・ブラッドベリ(小笠原豊樹訳)

RAY BRADBURY

ハヤカワ文庫(早川書房)、1976年

ISBN 4150401144

これは不朽のSFの名作ということだから、今更ここで紹介するまでもないのだろうが、でも載せてしまおう。絵や彫刻、あるいは音楽にふれ、自然の光景に出会い、言葉にならない感激に立ち尽してしまふことがある。そんな心がきらきらと透きとおるような、物語がつまってる。幻想的なストーリーはもちろん美しいが、それにもまして、ひとつひとつの言葉が響きあい、そのものが豊かな空間をつくる。

なにもない真空中に、言葉の発する、鉱物のように硬く美しい光が、つぎつぎと伝播し、余韻がつづく。そして幾重にも折り重なったきらめきは、読むひとのところに反射する。静かな夜に、風のさざめきを聴きながら読んだなら、きつと、宇宙を旅するような、果無く美しい光につつまれた空間が、眼前にひろがるだろう。そう言えば、今ごろ、惑星が直線に並んで、夕暮れの西の空に輝いてるらしい。

(篠崎健二)



『アストル・ピアソラ ライブ・イン・ウィーン』

Astor Piazzolla Live in Wien

PLATZ, 1998年、PLCP-80



Live in Wien



Piazzolla

今年古希を迎える私の父親の音楽趣味は、アルゼンチン・タンゴと日本の演歌である。若い人の中には「演歌はわかるけど、何でタンゴなの？」と思う人もいるかもしれないが、父の趣味はそれほど珍しいものではなく、昭和一ケタあたりにも生まれた人の中には相当数のタンゴ・ファンがいて、昭和三〇年代ごろ結構流行ったのだという。

タンゴと演歌の共通点を挙げてみるなら、それはある種の湿り気だと思ふ。私はこの湿り気がどうにも苦手で、聴いていると何とも言えなくじとじとしていて居心地が悪くなる。

(望月)

# ヤンヒポの三瓶です

二ヶ月ぶりの登場だすな。まあ過去の話は気にせずどんどん行きましょう。

という事で今回は、今、米国それも西海岸はLA、それもハリウッドのセレブレイティの間で大流行のご機嫌なオモチャを紹介するよ(あのケビン・スベイスも愛用だ)。その名もZappy Turbo。早い話、電動キックボードのパワフル版。見の通り後輪ベルト駆動でスチール製パイプフレーム、ブレーキはディスクブレーキまで装備されているのだ。電動ってぐらいだからボディの下側に車のバッテリーを薄く半分切ったぐらいのものがしまっている。これをボディ右下のソケットへ家庭用コンセントから充電器を使って充電するって寸法だ。その横にはイグニッションがついていてクルーズモードとターボモードの切り替えができる。クルーズモードの方がスピードは遅いが長距離走れるのは言うまでもない。

さて実際の乗り方だが、右側グリップの内側膨らんでる所がアクセルになっている。これを単車と同じように回すとワイヤーで抵抗スイッチを動かし強弱を付けられる。左グリップには後輪用ディスクブレーキに繋がるレバーがある。このブレーキの効きも抜群なのだ。しかし、ただアクセルを回すだけで

は発進しない。それだと流石に危ないだろう。最初はひと蹴り(時速三マイル)してアクセルをひねるとモーターが回る仕組みになっている。一旦走り出せば完全に止まらない限りモーターはアクセルに反応してくる。

気になるのは性能だ。まず登坂能力だが普通自転車では簡単には上れない坂道でも流石にスピードは落ちるが止まる事無く登ってくれる。また、航続距離だが平坦な所なら一〇キロぐらいは走る。ただ、走り続けるとモーターがかなり熱を持つ。しかし心配無用。モーターが一定温度を越えると自動的にブレーキが働くのだ。そして少し冷めればすぐ復活する。この辺りもかなり改良を加えたのだろう。改良と言えば、車のトランクに入るぐらいのサイズに折りたためるのだが、これはそれだけではない。前輪部分とフレームは完全に独立しておりそれを強力なダンパーで支えている。これがショックアブソーバーの役割をしていて路面の凹凸を吸収しているのだ。この辺りの構造もかなり練られているのだ。このオモチャ、良く見ると本当に優れた設計になっている。ただ日本の交通法

規からすると扱いがグレーという部分は否めない。あまりおおびらに公道を走り回ると咎められかねない。ただ、電動なので警察官の前では普通のキックボードのような顔をしていれば良いだけなのだ。因に、ヤンヒポは明治通りでバトカーにも遭遇したが特に止められる事は無かった。まあ、多少の演技力が必要かもしれない。さて、一番気になる価格だが、フルセットで\$六九九ポツキリ(今見たら\$七九九に上がっている。オイラの請求書には確かに\$六九九になっているの

に、、、)。これに日本までの送料が六〇〇〇円ぐらいだろう。メーカーのウェブから注文すると日本まで送ってくれる。ここには他にも色々変わった乗り物売っているのでは非見してみよう。一人乗りホバーボードなんてものもあるのだ。てな事で今回はこの辺で、、、。



Zappy Turbo



たためばこんなもん



ここに行けば動くZappyが見られるぞ!

<http://go-zeta.com/karasu.html>

## 日本にて二

京都の二泊目は、高級な旅館となった。ぼくは友達のうちへころがりこもうと思っていたのだが、東京に残ったプロフェッサーアーキテクトのために、一緒に旅館に泊まることになった。断っておくが、べつに普通のひとである。

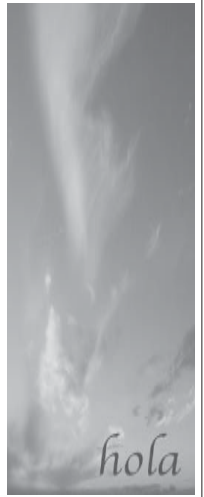
有名な、俵屋という、建築家吉村順三の手による旅館、ではないのだが、それに次ぐような、いわゆる老舗高級旅館である。普段そう簡単に泊まることはない。

客室は、数寄屋造り、普請をした大工さんの姿が目につくような、心のこもったつくりだった。洗面浴室などは、木を基本に近代化されていてとても快適だが、客間は、至って簡素な仕上げで、きつと長い年月このままだったのだろうと思うくらい、いま、に通じるものはない。電話はダイヤル式だし、もちろんインターネットなど通じない。

あとで聞いたところによると、ぼくら以外の六人は芸妓さん舞妓さんと大宴会をしたらしいのだが、(彼らは同じ通りに面する、別の老舗旅館にいた)ぼくらの部屋は静かだった。本当に静かだった。車の音も人の声も何もしない。CDもラジオもコンビューターもなく、テレビもつけず、不意にやってくる電話もない。

むりやり取付けたような古いエアコンのファンの音が、ちよつと似合わない音を発するだけだった。そして、時折すべての音が消えると、ほんものの空間が、ふつと現われるようだった。

静寂の中、彼は思索を巡らしているようだったが、ぼくは、何か、身体を縛りつけられているものから聞き放たれたように軽



く感じていた。ただ、静寂が、丁寧につくられた空間を支配している。ぼくらはそれを楽しんでた。高級なことである。

こんな静寂に身を包まれることがあるだろうか。子供の頃よく、夜に、窓の外で風に木々の葉がこすれる音を聞いたことを思い出す。それ以外の音は、何もしなかった。暗やみの中におおきな広がりを感じた。澄んでゆくように気持ちよかった。

まったく音のない世界。スタジオの無響室のよう



に、すべてのナミが吸収されてしまうのではなく、反対に、とてつもなく広い空間にナミが発散してしまい、音を感じるこのできない空間。

かつてサハラ砂漠(の入口)の大きな砂丘地帯を訪れたとき、そんな空間を体験した。まだ地平の先に、オアシスのような豊かな緑が連続し、そこへ繋がる土は黒々とひろがり、それらの背景には低く赤い丘が連なる。雲ひとつない空からは、容赦なく太陽が照りつける。空気の構成元素以外には、空気中には水蒸気すらないように、三つの水平な層は、上昇気流に揺らめきながらも、明瞭に、美しい

固有の色で分けられていた。茫漠とした地表を二週間前に借りたフィアット・ウノは、なんとか走っている。廻りにほかには何も見えない、とてつもない広がりとはどのようなものなのか、車を止めてみた。すぐ近くに居るのに、エンジンの音さえ小さく聞こえる。エンジンを止めてみた。

自ら発した声が、自分の耳にすら返ってこない。なにも反射しないから、自分の位置を決められないような不安な気持ち。身体に押寄せられるおかしなバランス感覚は、やがてひとを精神的に隔れないだろうかと思うくらい重たかった。

水の中に潜ると同じように、身体が全て大気に包まれているように感じたのだろうか。実際は大地があるのだが、太陽光さえも、全ての物質が、元素に還元されてしまうよう、身体がその元素の乾いた世界に包まれているようなのだ。生命とは反対の極である。フィジカルな身体などいとも簡単に、精神すらも、発散し還元し尽くされてしまうのではないかと、恐れのような気持ちを抱いた。

音がないことが、こんなにもひとを不安にさせるのかと思った。

砂丘は、頂きがすぐ近くに見えるのに、実際に歩き出すと、相当の時間をかけて遠く高くゆかないと到達できなかった。人間の大きさと比べると、いかに大きな丘なのかわかるが、風景の中では小さく見えた。砂は純粋な赤黄色の粒だった。結局、その夜は、熱射病にやられて一晩中水だけを飲んでうなっていた。そこでは、祭りのような太鼓とひとの声がひびいていた。日本のモンスーンとは正反対の世界。大工の繊細な手仕事とも対極にある。サハラ砂漠を北上してゆくと、地図ではやがてスペインへと至る。

(篠崎健一)



# 守宮じふいへ

あんまり暖かいせいで、今年は自然のものでも前倒しにやってくるけれど、今度は守宮が早くもわが家に出没し始めた。嬉しい。私はこの守宮を愛して、家の守り神と崇めているのだ。いつになくお早いおでましに何だか嬉しくなってきたので、少し守宮のことを調べてみた。

## 小さな密航者

一九九〇年二月、大量のミドリヤモリが輸入が日本に送られていたことが発覚した。東アフリカ沿岸とマダガスカル島周辺に分布するこのあざやかな緑色をしたヤモリは、絶滅のおそれのある野生動物の国際取引を規制するワシントン条約によって、その輸出入は自由にできないことになっている。密輸入だった。

毎日エサをあげる必要がなく、狭い場所でも飼える爬虫類をペットにする人は最近増えており、一時のブームを経て定着した感さえある。「禁じられた」ミドリヤモリだが、そのいかにも愛らしい大きな真ん丸の目と外観の色合いの美しさに心を奪われ、ダメとわかつてはいても、いや、ダメだからなおさらこれを欲しがっている人がいてしまう。

その年の六月、今度は別ルートで渡ってきたミドリヤモリが発見された。場所は大阪で開催されていた「花と緑の博覧会」の会場。マダガスカル島の北東に浮かぶ島国セーシェルから出品された双子ヤシの葉に隠れて密航してきたものだった。体長五センチほどの小さな身体で、密航期間は四〇日間。持ち前の絶食に耐えられる特性を存分に生かし切ったからこそ耐えた冒険だった。このことは新聞記事にもなり、密航者は人間の手により無事生まれ故郷に帰ることができた。生息環境もかなり異なる日本に彼らが住み着くことはなかったのである。もしそんなことになれば、他にいくらかもある例と同じく、日本の在来種との間でもめ事の原因になっていたかもしれない。日本には二ホンヤモリがいるのだから・・・。



## 実は彼らも密航者

ヤモリ科に属するトカゲ類は全部で約六五〇種もいて、世界の熱帯、亜熱帯として一部の温帯地方に広く分布している。そのうち二ホンヤモリは、日本国内では本州、四国、九州から沖縄まで、福島県以南の日本各地でふつうに見られる。全長一〇〜一二センチほどで夜行性。夜になると明かりに誘われて来る虫を獲りに窓をはい上がってくる彼らを見たことのある人は少なくないだろう。

しかし実を言うと、二ホンヤモリはその名にもかかわらず、もともとは日本にはいなかった。帰化動物なのである。原産地は中国南部で、現在でも台湾や中国東部から南部にかけて広く生息している。「それじゃあ名前の『二ホン』は日本人が勝手に付けてるだけ？」と思われるかもしれないが、そんなことはない。二ホンヤモリの学名はラテン語で Gekko japonicus とい、英語では ジャバニーズ・ゲコウ (Japanese Gecko)。国際的にも「日本のヤモリ」といって

認められている。かなり以前から日本にいたため、欧米人には混同されたのかもしれないが、二ホンヤモリを含めてすべてのヤモリは、そもそも熱帯や亜熱帯に住む動物。後の世に「二ホンヤモリ」と名付けられるヤモリたちの先祖は、中国南部から渡ってきたのだろうというのが定説だ。

ヤモリについての記述が日本で最初にあらわれるのは平安時代のこと。遣唐使を始めた大和との交流の中で、ミドリヤモリと同じように積み荷に紛れて渡ってきたと考えられている。つまり、二ホンヤモリもまた密航者だったのである。密航者として日本の土

を踏んだ彼らが定着できたのは、やはりこの土地に住みやすかったからだ。特に彼らにとつて人家はとも都合のいい住み家と言える。壁の後ろや柱の割れ目など身を潜める場所には事欠かないし、わざわざ自分で食べ物を探しに行かなくとも、住人の灯す明りで獲物たちは向こうから「飛んで火に入る夏の虫」。昆虫でもクモでも食べ放題というわけだ。

さらに、人間に直接的な害を及ぼすわけではなく二ホンヤモリたちは、特に迫害を受けるでもなく人々とい関係構築することに成功。日本での永住を許されることになったのであった。

## 家守？井守？守宮？

ところで、ヤモリを漢字で書くかどうかというのか？「家守」とする人も少なからずいるのではな

いか。理由は読んで字の如しで、私のように人家で人々とともに暮らすヤモリたちの姿を「家を守っている」と解釈するようになったからだろう。実際は、理由としては間違っていないのだが、残念ながら「家守」では間違い。家守とは江戸時代の地主

の代理人のことだ。

正解は「守宮」である。ひっくり返して訓読すれば「ミヤモリ」と読める。平安時代の漢和辞書『倭名類聚抄』によれば、「常二屋壁ニアル故二守宮ト名付クナリ」と記されている。また、古くはイモリと混同されていて、平安末期の辞書『類聚名義抄』では「井モリ」となっている。さらに江戸時代の貝原益軒による博物学辞典『大和本草』によれば、「守宮」にヤモリ、イモリの二つの読み方を付し、イモリについては「井中ニオルユエ、井モリト云フ」としている。

ちなみに、腹が赤いのがトレッドマークのイモリの方は、池や沼などを好んで住み家とする両生類の生き物。外観はヤモリやトカゲに似ているが、カエルなどと同類である。こちらはヤモリとは違って日本だけにいる固有種で、漢字で書けば「井守」となる。

そのほか、ヤモリの別な呼び名としては、福岡県の筑前地方の「カベコ(壁虎)」や大阪の「カベノボリ(壁登り)」などがある。カベコについては、読み方はもちろん違いますが、「壁虎」の文字は原産地の中国でも使われる。

## ヤモリ式験淫術

実は、ヤモリに「守宮」の字があてられたのはもう一つの理由がある。現代人が聞けば、誰もが「そんなムチャな」と一笑に付すような話だが、何はともあれ「大和本草」の説明を聞いてみよう。「コノ血ヲ婦人ノ身ニヌレバヲチズ、姪事アレバヲツルト云フ、此レ故ニ宮中ヲ守ルトイフ意ヲ以テ、守宮ト名付ク」

言い換えればこういうことになるだろう。「ヤモリの血を女に塗ると、どんなことをしても落ちないが、例外が一つだけある。女がどこぞの男と良からぬ企てをしたときだけ、それは消えてしまうのだ。これはつまり、ヤモリが子宮を守ってくれるということ。だから、この生き物を「守宮」と名付けたのだ」

根拠のほどは今もって不明だが、この「秘術」、どうやら密航者と前後してやはり中国からもたらされたらしい。「本草」の江戸時代からさらにさかの

(裏面へ続く)

(七面から続く)

ぼると、平安時代の医学書『医心方』にすでに似たような記述が見られる。これをかき摘んで言えば、以下のとおり。

「五月五日か七月七日にヤモリを捕まえて、これに丹(赤土)を食わせ、腹が赤くなったらカマに入れてかけ干しにせよ。百日経ったら取り出してすりつぶし、女の体につけよ。拭いても一生とれないが、陰陽のことあれば、ただちに消える」

陰とは女、陽とは男のこと。また陰とは淫でもあろう。同書はこれを「験淫術」とし、守宮はオスメスともに新たに交尾したものの三匹がよいと推奨している。この浮気調査法、平安時代の貴族の間で一時期もてはやされたことがあつたらしい。

帰化動物の多くは人間にその運命を翻弄され、不幸な道をたどった者も少なくない。新しくは、そもそも食用として輸入されながらもその強い生命力で生き残り、現在格好の釣りの対象魚として好まれ、そして生態系の破壊者として憎まれるプ

(二面から続く)

孰れにせよ、音が波である以上、私たちに大なり小なり物理的な影響を与えるのはまちがいないだろう。今、私はカバレフスキーの「チェロとピアノのためのソナタ」をうつつすらと流しながらこの原稿を書いているのだが、手を止めて耳を澄ますと、このチェロの響きによって体内の細胞たちが揺らされているような印象を受ける。自分の細胞のひとつひとつを見たり感じたりできるわけではないし、揺れを体感できるような大音量で聞いているわけではないので、まあ、幻のようなものだが、音が聞こえている以上、振動が身体に伝わっているという事実は厳然とある。だとしたら、そこに何かの効果があ

ラックバスなどがその典型であろう。彼らに比べれば、現在に至るまで比較的人間とはうまく付き合ってきた帰化動物であるヤモリたちだが、「験淫術」の例のように、特に害はないからといってまったく安全というわけではない。人間たちは、オモチャが欲しいときもあるのである。



(望月)

などと思いを巡らす。

この世界は振動で埋めつくされている。私たちは振動に包まれて生きていて、と言ってもいいだろう。音や光、テレビや携帯電話の電波。延いては宇宙線まで。これらの全ての振動が互いに干渉しあいながら、私たちの細胞を揺さぶっているのではない。そんなことを思う。

星空を見上げる。あそこからやってきた光も、また、私の細胞を揺らしているのだろうか。ロマンティック。だが、あの静かな光は、実は波を利用して人類を支配しようとする宇宙人が送りつけているのである。それと気づかぬうちに地球人は彼らの波によって洗脳されてしまう。もちろん、これは馬鹿げた生活をおくる馬鹿げた私の殊更に馬鹿げた夢想である。しかしながら、そんなことが絶対ないとは誰にも言いきれまい。そう思う私は、やはり馬鹿ものであろうか。完全に馬鹿者である。

(全太)

編集協力者大大募集中! (編集風景)



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku, Tokyo 166-0015,

Voice : +81-3-3220-0644

Facsimile : +81-3-3220-0640;

e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

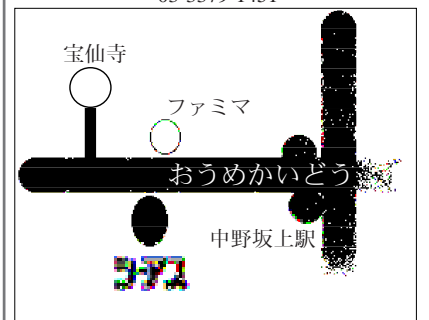
篠崎健一アトリエ

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451



編集後記  
からす新聞第二巻第五号(通巻第四〇号)、無事、発刊できました。  
新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。  
御意見・御要望をぜひぜひお寄せ下さい。  
次号発刊予定日は二〇〇二年五月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。